KOBE GAKUIN UNIVERSITY
神戸学院大学　人文学部
人文学科
教授　宇野　文夫（UNO Fumio）

■ テーマ名
現代における芸術音楽の作曲

■ キーワード
現代芸術、現代音楽、作曲技法、伝統と現代、世界と日本

■ 研究の概要
芸術音楽の作曲を課題としています。今日の芸術音楽とは、「現代音楽」と言われるもので、西洋のクラシック音楽から変化発展してきたものです。現在の一般の人々にとって身近な音楽は、いわゆる「ポピュラー音楽」ですが、こちらは娯楽としての音楽であり「現代音楽」とは言いません。20世紀の初頭辺りから、芸術と娯楽が明確に乖離していき、音楽も楽しみとしてのものと芸術的なものとに分かれていくことになりました。現代の芸術的なものとしての音楽が「現代音楽」ということになります。

現代の芸術とその周辺には、永遠に答えの出ないような多種多様な課題や問いが渦を巻くように存在しています。芸術が単なる娯楽（楽しみ）ではないものとすると、そこでは何が行われているのでしょうか。芸術には創作者や送り手と享受者が存在しますが、その関係はどのようなものでしょうか。更にそれらを成り立たせるコミュニティー、延いては文化とは何でしょう。歴史や地域、政治や世界情勢、個人の心から民族、宗教、それらの文化の示す世界観、宇宙観はどのようなものでしょう。そのような中、人は自らどのように感じ考え生きるべきなのでしょうか。

一方で、芸術創作の現実的側面は、具体的実際的なものです。作曲においては、先ず何の音をどのぐらいの長さで設定する（楽譜に書く）か、次の音をどう決めるのか、そこでの和音は、そして楽器は等々。ここにあるのは極めて即物的で技術的な課題であり、創作はそういった作業の積み重ねです。

今現在、私が直接の課題としているのは、以下の４点です。声楽作品において、日本の古歌を使用して現代の音楽世界をいかにして実現するか。様々な管弦楽器の独奏曲の創作にどのようなヴィジョンがあり得るか。ピアノの楽器特性を十分に活用した現代のピアノ独奏作品をどのように作りうるか。現代において伝統的な室内楽曲の作曲にどのような可能性があるか。一方で、足掛け５年を要した４曲のピアノ作品の録音が終わり、CD としてリリースの準備をしています。

■ 他の研究／技術との相違点
作曲作品の公開は、主に同志の作曲家団体による演奏会への参加という形で行われ、昨今は動画配信も行われています。音楽関係の団体としては、「日本現代音楽協会」「関西現代音楽交流協会」「神戸音楽家協会」「茨木新作音楽展」の会員になっています。

■ 今後の展開、実用化へのイメージ
現在の課題としては、2025年10月に初演を予定している室内楽の作曲で、加えて翌年にはヴァイオリン独奏曲の演奏会、更に年内には延期となっているピアノ独奏作品集の CD のリリースも予定しています。

■ 関連業績（特許・文献）
作曲作品
「室内楽第11番～フルート、バス・クラリネット、チェロ、ピアノ、ソプラノ歌唱のための」（2024）（2024年初演、大阪・茨木）
演奏会企画
「音楽の可能性コンサート・シリーズ第６回」（自作品「おもいで」、「破片Ⅱ」、ピアノ・ソナタ第１番「史書の扉から」、ジョルジュ・エネスコ「カリオン・ノクターン」、アルノルト・シェーンベルク「ピアノ作品33a」、カイコスル・ソラブジ「温室の中で」）（2024年12月28日、神戸・里夢）
評論・論考
「音楽史に遺したい革新的管弦楽曲５曲」（2025年３月・月刊「音楽現代」誌）、「ショスタコーヴィチの音楽的特徴とその位置～交響曲を巡って」（2025年２月・月刊「音楽現代」誌）、「サティ、ラヴェルへとつながるフランス音楽の作曲技法と音楽の特徴」（2025年１月・月刊「音楽現代」誌）、「今、私が注目する指揮者たち」（2024年12月・月刊「音楽現代」誌）、「ブルックナー体験を巡って」（2024年10月・月刊「音楽現代」誌）、「音楽史に残るピアノ・ソナタ10曲」（2024年９月・月刊「音楽現代」誌）、「ベートーヴェン演奏のレジェンドたち」（2024年８月・月刊「音楽現代」誌）、「リヒャルト・シュトラウスの本質を聴く10の作品」（2024年７月・月刊「音楽現代」誌）

■ 研究者から一言
芸術の活動は、芸術への感動とその行為への強い興味、愛着により為されるものです。それは享受する場合も、創作する場合も同様です。音楽の場合は演奏することも同様です。普段芸術に特に深い関わりを持つことのない方々でも、小さな心の動き、わずかな興味から芸術に接することで、生活や人生がより深く豊かなものになればと願っています。